

にってん フォーラム

高田馬場^{いち にーさん しっ!}1-23-4 ———— 長岡英司

「江戸を体感ーえどはく移動博物館ー」開催報告

————— 秋間敬代

にってんワークショップ開催報告

「式場隆三郎展」開催中————— 伊藤宣真

多岐にわたる支援活動、

加藤俊和氏にヘレンケラー・サリバン賞————— 雨宮雅美
春風亭昇吉師匠のUD落語絵本ワークショップ開催

————— 伊藤宣真

知っていますか？ロービジョン～0と1の間————— 白石仁司

川崎市視覚障害者情報文化センターだより————— 澤村実希

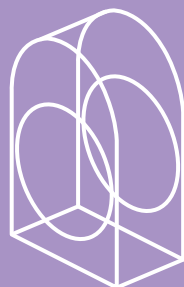
風を感じてペダルをこいで————— 伊藤聡子

私と日点————— 柳谷 保

明日につながる支援の力

リレーエッセイ————— 清水重人

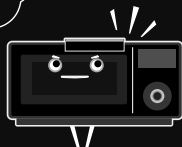
ご存じですか？こんな商品



らく楽アシスト

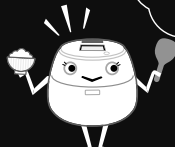
音声で、 あなたをアシスト。

あたため
がんばります。



レンジグリル

18時30分に
炊き上がります。



ジャー炊飯器

調理中はそばを
離れないください。



IHクッキングヒーター

お風呂の栓は
しましたか？



エコキュート



https://twitter.com/ME_RakuRaku



らく楽アシスト

検索

www.MitsubishiElectric.co.jp/home/shiawase-share/rakuraku/



三菱電機株式会社

〒100-8310 東京都千代田区丸の内2丁目7番3号(東京ビル)

●三菱電機お客さま相談センター 家電品の購入相談・取扱い方法

フリーダイヤル
0120-139-365 (無料)
いつでもセンター 365日

携帯電話・PHSの場合
TEL 0570-077-365 (有料)

FAX 0570-088-365 (有料)

フリーダイヤル・ナビダイヤルをお使いいただけない場合は
TEL 03-3414-9655 FAX 03-3413-4049 (有料)

■ご相談対応	平日 9:00 ~ 19:00	左記以外の時間は 受付のみ可能です。
	土・日・祝・弊社休日 9:00 ~ 17:00	

*電話番号は変更になる場合がございますので、あらかじめご了承ください。
*電話番号をお確かめのうえ、お間違のないようおかけください。

貴重な写真のご寄贈

ながおかひで じ
理事長 長岡英司

日本語の点字記号は石川倉次^{いしかわくら じ}によって翻案されました。その採用が決まったのは、1890（明治23）年の11月1日（日本点字制定記念日）です。石川は、1859（安政6）年に浜松藩士の家に生まれ、教育者として生涯を送りました。点字の翻案は、東京盲啞学校での勤務を始めてから4年後のことです。師と仰ぐことになった同校の小西信八^{こにし のぶはち}に強く乞われて赴任し、日本語点字の翻案を託されたのでした。晩年のその二人が並んで立つ場面を収めた写真が、先般当館に寄贈されました。1937（昭和12）年に撮影された、縦27.5cm×横22.4cmの大判の鮮明な写真です。撮影場所は、現在の筑波大学附属視覚特別支援学校の所在地に1910（明治43）年に落成した、官立東京盲学校の校舎の車寄せ（1968年に明治村に移設）です。中学時代をその校舎で過ごした私には、とても懐かしい場所です。

この写真を寄贈してくださったのは、長年にわたり理数情報分野の点訳をされているかたで、義理の父上が点字を使う視覚障害者だったのだそうです。とは言っても、ご結婚されたときには既に亡くなっていて、点訳を始めた後でそれを聞かされたとのことです。ご遺品にこのような貴重な写真が含まれているのを知ったのは、ごく最近になってからと伺いました。

その義父にあたるかたは吉松常陰^{よしまつ ねかげ}といい、1906（明治39）年に、海軍軍人・吉松茂太郎^{も たろう}の次男として生まれました。茂太郎は、装甲巡洋艦「常磐」^{と きわ}の艦長として日露戦争の日本海海戦に参戦し、後に連合艦隊司令長官などを歴任して、海軍大将にまで上り詰めた人物です。そのような家庭で育った常陰は、盲学校でしっかりとした教育を受け、理療の職業技術を身に付けただけでなく、文化や学問に接する機会も多かったようです。それを伺わせる遺品として、1930年代の米国における視覚障害リハビリテーションの資料、ご本人や当館創立者・本間一夫^{ほん ま かず お}が詠んだ歌が掲載されている短歌集などがあり、併せてご寄贈いただきました。

＊ 以上、敬称はすべて省略しました。

日本点字図書館附属ふれる博物館開館5周年記念特別企画

「江戸を体感—えどはく移動博物館—」開催報告

東京都江戸東京博物館 学芸員 ^{あきまたかよ} 秋間敬代

「江戸博」の略称で知られる東京都江戸東京博物館は、大規模改修のため、令和4年度から休館しております。現在は、都内のさまざまな場所に学芸員が出向き、出張展示や出張ワークショップを通して江戸東京の歴史や文化を伝える「えどはく移動博物館」を行っています。

その一環として、ふれる博物館の開館5周年を記念した特別企画「江戸を体感—えどはく移動博物館—」(会期：6月14日～7月1日)に協力しました。9日間(開館日：水・金・土曜日)で113人の方にご来館いただき、そのほとんどが視覚障害者とその付添の方でした。

企画の内容は、^{かつちゅう}甲冑(複製)の着装体験や歌舞伎の鳴物の演奏体験のワークショップを行うとともに、江戸東京博物館の模型や浮世絵の版木を展示しました。また、「手と目でみる教材ライブラリー」が所蔵する^{かつしかほくさい}葛飾北斎「^{ふがく}富嶽三十六景 ^{かながわおきなみうら}神奈川沖浪裏」のレリーフや、力士の模型も展示されました。

1つ目のワークショップ「甲冑の着装体験」は水曜日と土曜日に行いました。まず、すねを守る「^{すねあて}臑当」、太ももを守る「^{はいだて}佩楯」、腕を守る「^{こて}籠手」、胴体を守る「^{どう}胴」、頭部を守る「^{かぶと}兜」などの各パーツに触れ、形状や素材、デザインなどを確認していただきました。

「^{こて}籠手」は、筒状の布地に鉄板や鎖が縫い付けられています(写真1)。肘や手首の部分は鎖が用いられており、自由に動かすことができます。実際に触るのは初めての方が多く、素材や色、布地の文様など、さまざまな質問をしてくださいました。

それぞれのパーツに触った後に、ご希望に合わせて着装体験を行いました(写真2)。実際に着てみると、重さだけではなく、各パーツがどのように重なり合っているかを知ることができます。「重量や質感や着方が分かって良かった」、「今後、読書する時に想像が広がって嬉しい」などの感想がありました。

2つ目のワークショップ「歌舞伎の音 鳴物体験」は金曜日と土曜日に行い

ました。DVDでプロの演奏家の演奏と解説を聞いた後に、それぞれの楽器を触って形状を確認し、実際に演奏していただきました。歌舞伎などで耳にしたことのある鳴物ですが、演奏するのは初めての方がほとんどでした。プロの演奏をお手本に練習していくうちに、皆さん楽しく演奏できるようになりました(写真3)。

ワークショップを行った後は、そのほかの展示にも触れていただきました。江戸東京博物館の模型(縮尺:1/300)は、ゆっくりと触りながら建物の形やデザインを体感していただきました(写真4)。江戸博に来館した際の思い出をお話してくださる方もいらっしゃいました。

ワークショップや展示を通して、たくさんの笑顔と会話が生まれたことが大変印象的でした。短い期間でしたが、ご来館いただいた皆様に、江戸の歴史や文化を体感していただけたのではないかと思います。



(写真1) 籠手を触る



(写真2) 甲冑の着装体験



(写真3) 雨うちわの演奏



(写真4) 江戸東京博物館の模型

にってんワークショップ 「夏休みキッズチャレンジ!」開催報告

昨年度から開始した啓発講座「にってんワークショップ」。今年度は、小学生を対象とした特別企画「夏休みキッズチャレンジ!」からスタートしました。8月5日の午前と午後に同内容で2回実施し、午前の部は9組22名、午後の部は9組26名の親子が参加しました。

子どもたちには三つのチャレンジをしてもらいました。一つ目は「声かけと手引き」。視覚障害当事者でもある館長の立花明彦が白杖を持って登場し、会場に問いかけながらその役割について語り始めると、子どもたちから盛んに手があがりました。活発な発言で体が温まったところで、親子ペアになって声かけと手引きをロールプレイ。町なかで困っている目の不自由な人と出会っても、多くの人はどう接したらよいか分からず、最初の一声がなかなかかけられませんでした。この体験は、親御さんたちにとっても有益だったようでした。

二つ目は点字の読解です。点字のしくみを学んだあと、配布したテキストに印刷された短い単語と、商品の容器や包装に付された表示を、目で見えて読めるかチャレンジしてもらいました。



点字器で点字を打つチャレンジ

そして三つ目は点字を書くチャレンジ。小型点字器を使って名刺大のカードに自分の名前を打ってもらい、それを立花が触読してまわりました。点字を書いたことはあっても、それを実際に指で読んでもらうのは、ほとんどの子どもたちにとって初めての体験でした。紙だけでなく透明のシールに打って必要なところに貼るという点字の便利な使い方も経験してもらいました。

チャレンジのあと点字図書と録音図書の書庫を案内し、最後に学びを深めた証として、立花からひとりひとりに修了証を差し上げました。小型点字器もプレゼントしたところ、後日4人の子どもたちから立花あてに点字で書かれたお手紙が届きました。子どもたちが目の不自由な方々を思いやり、積極的に接するきっかけとなったワークショップでした。

「式場隆三郎展」開催中

いとうのぶかね
本部長 伊藤宣真

しき ばりゅうざぶろう
式場 隆三郎 (1898-1965)。市川市にある式場病院を創立した精神科医、ゴッホの研究者、山下清の支援者、あるいは民藝運動の推進者として有名な先生ですが、かつては当館の後援会長を務めてくださり、当館事業の発展に多大な貢献をされました。

今、民藝運動に深いかわりを持つ我孫子市の白樺文学館において「式場隆三郎展」を開催しています。同館と式場病院、そして当館の三者が主催となり、先生の多彩な姿を紹介しています。すでに民藝運動を中心とした前期の会期は終了し、当館との関わりを中心とした後期の会期が始まっています。終了は来年1月14日です。

式場先生と当館とのつながりは、1954年、先生からゴッホに関する著書の点字版製作を依頼されたことに始まります。その後、事業拡張に必要な隣地取得のための募金活動では中心的な役割を果たし、創立者本間一夫の欧米視察では、金銭的なバックアップを保証し半ば命令的に渡航を促しました。その結果、取得した隣地は録音図書製作貸出事業の基礎となり、欧米で収集した盲人用具は用具事業の開始から共用品への流れの原点となりました。

後期の展示では、当館との関わりを示す貴重な資料を公開し、当館の発展、ひいては視覚障害者の生活、文化の向上につながった先生の熱い思いを皆様に伝えたいと思います。

「式場隆三郎展」2024年1月14日まで
休館日：

1/8を除く月曜日・12/29～1/3・1/9
我孫子市白樺文学館（電話：04-7185-2192）
千葉県我孫子市緑二丁目11番8号



多岐にわたる支援活動、加藤俊和氏に ヘレンケラー・サリバン賞

東京ヘレン・ケラー協会 点字ジャーナル

あめみやまさ み

雨宮雅美

視覚障害当事者がその支援に感謝の意を表する、第31回「ヘレンケラー・サリバン賞」は、日本盲人福祉委員会評議員（災害担当）で、視覚障害者の歩行の自由と安全を考えるブルックの会代表、点字楽譜利用連絡会副会長ほか、点字、移動、災害など視覚障害者に関わる多方面で活躍する^{かとうとしかず}加藤俊和氏（78歳）に決定しました。

加藤氏は高校生の頃にボランティア活動の一環として点字と出会い、以来、点訳ボランティアとしての活動を現在に至るまで続けています。大学卒業後は一般企業の研究職に就きますが、一大決心し福祉の世界へ。1980年に日本ライthouseへ転職。後に常務理事を務めました。

教科書の点訳については、専門性の高い数学・理科や情報処理関連の点字表記をまとめる作業に関わり、音楽点字楽譜では教科書レイアウトの統一に尽力。現在も普及活動や触図への取り組みなど、第一人者として活躍されています。

また、視覚障害者の生活支援についてもホーム転落事故に対して点字^{ないほうせん}ブロックの内方線の提案や駅ホーム・踏切の現場検証を行うなど安全な移動手段について改善と提案に取り組んでいます。東日本大震災の被災視覚障害者支援時には行政と連携した支援を実現するため、組織系統の見直しや情報交換等を日盲委の災害対策本部事務局長として担い、支援団体や点字図書館ともつながりのない中途失明者も取り残すことのないよう、必要な情報を届けるため支援の手を伸ばすなど、視覚障害者に関わる多方面の分野で比類ない数々の活動に精力的に取り組まれています。

中央省庁の関係では、文部省（現・文部科学省）の中学部点字教科書編集協力者として、経済産業省には高齢者障害者支援技術専門委員会委員、福祉用具技術専門委員として、国土交通省にはJIS企画原案作成委員会委員などを務め、国の施策に対しても、現場の実情を踏まえた示唆的な発言・提言をし、今もお現役で支援活動を続けられています。

春風亭昇吉師匠の UD落語絵本ワークショップ開催

本部長 伊藤宣真

前号の巻頭言で理事長・長岡が紹介しました触覚でも楽しめる落語絵本の製作に向けて、思い込みで作るのではなく視覚障害者の意見をいろいろとお聴きしようと、9月9日、当館を会場に発起人の^{しゅんぷう ていしょうきち}春風亭昇吉師匠のUD落語絵本ワークショップが開催されました。

今回は小学生5人を含む25人の視覚障害の方々に参加いただきました。まず前半は昇吉師匠による今回取り組んでいる「まんじゅうこわい」と、「子ほめ」の二つの演目をお聴きいただき、後半は五つのテーブルに分かれて、試作中の「まんじゅうこわい」の絵本に出てくるヘビ、馬、セミなどの触図や、ムカデ、まんじゅうなどの3Dプリンター模型、落語の舞台となる長屋の模型などを触っての感想、また楽しんでいただいた落語や今回のワークショップ全体の感想をいただきました。

前半の昇吉師匠の間近での落語では皆さん大笑いされ、後半の意見交換では、「もっとデフォルメして」「もっとリアルにして」と触図に関して相対する意見や、「まんじゅうは柔らかい素材じゃない」という模型に関しての意見、また、演じているときの間の表情が知りたいなど、たくさんのご意見が寄せられました。

今回の高座は会議テーブルを二つ合わせ、そこに師匠がお持ちになった緋毛氈^{せん}と座布団を敷くというありあわせでしたが、それを触ったり、師匠の浅黄色の着物に触れたり、と、予定にないこともあったにぎやかな会でした。

今後いただいたご意見を参考にして製作し、販売するほか、クラウドファンディングでご支援いただいた資金により、全国の盲学校、点字図書館に寄贈する予定です。

知っていますか？ロービジョン～0と1の間

文化放送 制作部 しらいしひと し
白石仁司

私は現在 56 歳ですが、およそ 20 年前の 30 代半ばで緑内障が見つかりました。その後、右目は 5 年ほどでほとんどの視野がなくなりました。幸いにも左目は症状が進まず、日常生活はさほど不自由なく送ることができました。しかし 2022 年の 2 月くらいから左目の視野欠損が進み、いよいよ日常生活で不便を感じるようになりました。

会社などの慣れているところの歩行や、パソコンも拡大・色反転機能のおかげでなんとかできたので、通常の仕事ぶりは、健常者と同じように周囲に映っていたと思います。

いわゆるロービジョン者となった私が一番初めに感じたことは、自分の状態が周りに全く理解されていないことでした。同情や手助けを求めているわけはありません。私が普通に見えていると思って接してくれる方々に申し訳ないという心苦しさが募ってきたのです。

例えば、人の顔が認識できないのですが、通りがかった人は、「先日はありがとうございました」などと挨拶をしてくれます。しかし私はそれが誰なのか分からず、その人に合った御礼や受け答えなどができずにいます。他には、お店のトイレで、男女の区別がトランプのキングとクイーンのようなマークで表されていると、どちらに入っていいか分からず、オロオロすることがあります。周りから見ると、トイレの前で不審者のような動きをしている私を不思議に思うことでしょう。

このようなことが日常で頻繁に起こることとなり、人間は傍目からは分からなくても色々な事情を抱えている人がいることを身をもって実感しました。

“見える”、“見えない”という 0 か 1 ではなくて“ある程度見えて、ある程度見えない”という 0 と 1 の間に無数の現実があるということを伝えたく、「知っていますか？ロービジョン～0と1の間」という番組を企画しました。

第 1 弾は 2022 年 9 月、第 2 弾は 23 年 3 月に放送されました。そして第 3 弾は 23 年 9 月放送。番組では専門の眼科医のお話も伺いつつ、私を含め様々なロービジョン者の見え方や悩みを紹介しています。ロービジョンになって初め

て気付くことを、健常者にも少しでも理解されることで、ひいては目以外の病気の方のことを想像したり、自分が不可思議に思っている人の言動にも何か理由がある可能性があると考えることが、多様性を受け入れる社会構築の一要素になるのではと思って番組を制作しています。



左：白石仁司氏 右：サヘル・ローズ氏

番組の取材を通じて感じた

ことは、「他人のことを100%理解することは不可能」ということです。同じ“ロービジョン”であっても、私の見え方と他の人の見え方は全く違いますし、困っていることも違います。しかし100%理解ができなくても、少しでも理解しようと興味を持つことが大事だと思います。私も、興味を持って質問してくれる人には、100%理解されないのは承知の上で、少しでも分かってもらえるように説明します。

番組を聴いた人が、このような思いを持っていただければ、視覚障害に限らず色々な人の現状に寄り添った思いやりに繋がるのではないかと考えています。

この番組はおかげさまでギャラクシー賞（※）奨励賞という賞をいただきましたが、聴取者の方からいただくメールなどは視覚障害の方がほとんどです。もちろんその反応はとても嬉しく大変参考になるので一番重要な感想です。しかし、障害者がより生活しやすい環境をつくるためには、健常者に障害者の現状を理解してもらうことだと思います。

番組の目標は5つの要素の連携です。①医者 ②患者 ③教育 ④行政 ⑤企業。一步一步になりますが、この5つの要素がうまく連動できるように、今後も番組作りをしていきます。

※「ギャラクシー賞」：放送批評懇談会が日本の放送文化の質的な向上を願い、優秀番組・個人・団体を顕彰するために、1963年に創設された。放送批評懇談会の会員が一貫して審査にあたり、放送業界で最も権威ある賞のひとつとされている。

川崎市視覚障害者情報文化センターだより

眼科医療との連携 ～ビジョンサポート川崎の活動～

利用者支援グループ さわむら み き
澤村実希

医療と福祉の連携、近年よく聞かれる言葉ですが、当センターも多種職連携に支えられて仕事をしています。今回は、眼科医療とセンターの連携についてご紹介します。

始まりは、センター近隣の総合新川橋病院眼科スタッフがセンターに足を運んでいただいたことからです。2020年のコロナ禍で行き来が難しくなったため、毎月1回情報交換の場をオンラインで持つようになりました。現在4年目に入り、川崎市やその周辺の眼科医療者に輪が広がり、「ビジョンサポート川崎」と名前をつけて活動を継続しています。

お互いの専門性を知り、課題などを少しずつ共有するなかで、眼科医療、障害福祉、高齢福祉がより近づいて支援していくきっかけづくりに気持ちが向かいました。そこで、メンバーのいけがみ眼科整形外科・眼科医澤崎弘美先生が、高齢者の支援者（ケアマネージャーや介護従事者ら）に対して「知って活かそう—高齢者の見えにくさがもたらす影響とリハビリの大切さ—」と題してご講義をしてくださることになりました。先生には、あたたかいお言葉で眼疾患と心身に及ぼす影響についてわかりやすく説明していただき、またセンター職員も高齢者支援の実際について紹介しました。「ビジョンサポート川崎」活動を積み重ねることで、それぞれの役割を同じ方向を向いて果たす視点を持てるようになったと考えます。そして「見えなくてもリハビリにつながれば笑顔と自信を取り戻せる」というメッセージを当日は十分に伝えることができたと思っています。

高齢になって視覚に障害を持たれた方々が、住み慣れた地域で最後まで自分らしく生活していくために、関係機関の連携は大切です。今後も丁寧に関係を築きながら仕事をしていきたいと考えています。

日本点字図書館は、指定管理者として、川崎市視覚障害者情報文化センターを運営しています。

風を感じてペダルをこいで

いとう ふさこ
点字製作課 伊藤 聡子

タンデム自転車をご存じでしょうか。ハンドル、サドル、ペダルが前後に二つずつある二人乗りの自転車です。晴眼者に前に乗ってパイロット役をしてもらい、後ろに視覚障害者が乗れば、一緒にサイクリングをすることができます。

私のタンデム自転車との出会いは、公益社団法人東京都盲人福祉協会の役員になり、年に3、4回皇居周辺にあるパレスサイクリングロードで行われている「視覚障害者とタンデムを楽しむ集い」の担当になったことでした。自転車の運搬やパイロットは東京サイクリング協会の方々に協力していただき、1991年から続いている行事です。

交代で2キロほどのコースを往復するのですが、木陰ではすがすがしい風を感じ、木々の香りがしたり、鳥の声が聴こえたり、何よりパイロットの方に周囲の様子を説明していただきながらおしゃべりするのが楽しく、そして、貴重な運動の機会になっています。

今年（2023年）7月1日から、東京都でもようやくタンデム自転車の公道走行が認められ、やっと47都道府県のどこでも乗れるようになりました。これからが楽しみなところなのですが、気軽にどこでも安全に乗れるようになるにはいくつも課題があります。

まず、車道を走行しなくてはいけませんので、交通事故と隣り合わせです。車にもタンデム自転車が走っていることを認識してもらい、お互い交通ルールを守る必要があります。海外にあるような自転車専用道路が増えてほしいものです。

また、タンデム自転車を買うと10万円以上するようで、全長2メートルほどあるタンデムは、駐輪スペースの問題もあることから、なかなか個人で持つのは難しそうです。普及のためにはレンタサイクルにタンデム自転車も加えてもらうとか、障害者スポーツセンターなどで練習できる機会があると良いのではと思います。

タンデム自転車は風を感じてペダルをこぐ爽快なスポーツ。家族や友人同士で楽しく乗れるコミュニケーションツールにもなります。多くの方に楽しんでもいただきたいです。



私と日点

利用者 やなぎや たもつ 柳谷 保

私の「日点との出会い」は10数年前のことである。それなりの年数ではあると思う。62歳で早期退職した私は、県立盲学校の点字教室に通い始めたのだが、幸運にも半年でなんとか点字が読めるようになった。先生方には深く感謝申し上げる。最初は学校の図書館の病気シリーズ(約30巻)を借りていたが、文学部出身ということもあり、「生きた文章」に飢えていたようである。

点字教室では、サピエの存在も薄々理解していたし、ブレイルメモの操作も教えていただいたが、元来がアナログタイプでインターネットやSNSに全く関心がない私が、日点貸出の書籍に、それも英仏文学の翻訳小説のジャンルに落ち着いたのも至極当然のことであった(私はドイツ文学者のはしぐれであった)。

私のような読者は今時珍しいかと思う。昭和の第一次ベビーブーム世代のアナログ人間が、それも政治経済や理系分野に疎いまま老人になってしまったわけで、やはり「本」型の点字書籍に拘るのも致し方ないと思う次第である。「情報」よりは「書物との対話」に心の充足を求める所以であり、社会を静観する引退者の心境でもある。

そんな狭量の私にとって「おすすめ図書」と「この本に注目」とは一種のオアシスとなっている。「あれもこれも読まなければ」という切迫感に襲われがちな人間——三流人間——にはありがたい企画である。日々タクラマカン、ゴビ、サハラの漂泊者の思いである。立川談志の生い立ち、星座の話、銀閣の話、植物界裏話等々。

日本各地の県民性キャラにも食指を動かされたが機会を逸したままである。案内文には「山形県民は嘘が大嫌い」とあったがこれは解る。私は東北人を自負する山陰人である。首都圏に住まないことも「日点貸出会員」である理由のひとつかもしれない。イナカップが日点のファンであってもいいではないか。

◆ ◆ ◆ 明日につながる支援の力 ◆ ◆ ◆

このコーナーでは、当館をご支援くださっている団体・企業などをご紹介します。
ます。(総務部)

地球の石科学財団 奇石博物館

当館附属^{いけだてるこ}池田輝子記念ふれる博物館では、年2回、テーマを変えて企画展を開催しております。共催の^{おうちすすむ}大内進先生が主宰する「手と目でみる教材ライブラリー」の所蔵品を中心に、立体に触れることで視覚障害者の教養を高めようという目的によるものですが、昨年秋から今春まで開催した「石」の企画展、今年夏に開催した「恐竜」の企画展では、静岡県富士宮市にある、珍しい石を集めた奇石博物館にたいへんお世話になりました。

当館の利用者でもあった^{さかいようた}酒井陽太名誉館長から、ぜひ所蔵品を視覚障害者に触っていただきたいとお申し出があり、石をテーマにした企画展が実現しました。しかしそれにとどまらず、恐竜の化石もお持ちのことから今度は恐竜をテーマにどうでしょうとご提案いただき、お持ちの化石を提供いただいただけではなく、国立科学博物館、恐竜博士で著名な^{まなべまこと}真鍋 真 同館副館長をもご紹介いただき、この7月から9月まで、とても充実した恐竜展「ジュラシック・パーク」を開催することができました。

視覚障害者の知的欲求にご理解いただき、展示品の貸出だけでなく、運搬、展示会場のストーリー作り、パネルデータの製作等、すべて無償でご協力いただきました。深く感謝申し上げます。

地球の石科学財団 奇石博物館
〒418-0111 静岡県富士宮市山宮 3670
電話 0544-58-3830



富士宮市にある奇石博物館
(写真提供：奇石博物館)

「高きに登るには低きよりす」を忘れずに

しみずしげと
自立支援課 清水重人

「先生！帰宅したら習ったこと忘れちゃいました！もう歳なのか頭に全然入らなくて……」「大丈夫ですよ、もう1回ゆっくり練習しましょう」このような訓練生との会話から始まり、相談や最近の話題が入ると訓練よりも会話の時間のほうが長くなることもある自立訓練。話し好きのかたも話が落ち着くとグッと集中力が増し、集中しすぎて休憩の合図と同時にグタっとなってしまう方も。

自立訓練（生活訓練）は自立した日常生活を営むために必要な訓練、生活等に関する相談及び助言その他の必要な支援を行うもので、自立支援室ではパソコンやスマホ、歩行、点字や日常生活動作等の訓練を個別支援計画に則って行っています。職員間での状況・課題の共有や、計画に沿って訓練が行われているか、新たなニーズがないか訓練生に確認（モニタリング）も行っています。

職員は訓練生のストレングス（強み）や苦手を感じる部分を観察し、コミュニケーションを取りながら訓練を進めていく必要があります。しかし、訓練生の意に沿えていなかった、説明不足だった、もう少し傾聴すべきだったと反省することもあります。

最後に、ある訓練卒業生からの声を一部ご紹介します。

「私にはいくつかの趣味がありましたが、視覚障害者になって、その殆どを失いました。絶望のどん底にあって、子供の頃から50年近くも続けてきたアマチュア無線は復活できないかと思い続けてきました。（中略）先生はアマチュア無線のソフトは初めてであったと思いますが、解決策と一緒に考え、試してくれました。（中略）おかげで、今は毎日アマチュア無線を楽しんでいます。課題が解決したのです。張りのある生活です。自立支援室で訓練を受けることができて本当に感謝しています。」（抜粋終わり）

このエッセイの題目にある通り、訓練では必要な基本を繰り返し練習し身につけていくことが大切です。これからも訓練生の自信や生きがいに少しでもつながるよう二人三脚でまい進したいと思います。

ご存知ですか?

こんな商品

わくわく用具ショップより、どなたが使っても便利な新商品をご紹介します。ウェブショップからもお買いものができます。ぜひご利用ください。

お問い合わせ 03-3209-0751

URL <https://yougu.nittento.or.jp/>

3.2 型液晶ワンセグTV搭載ラジオ

〔大きさ〕(幅) 88 × (高さ) 142 × (奥行) 19mm

〔重さ〕 約 132g (電池を除く)

〔メーカー〕 カイホウジャパン株式会社

〔価格〕 8,100 円 (税込み)



文庫本サイズのワンセグTV放送も入るFM／AMラジオです。

操作時の音声ガイドや操作音はありませんが1センチ角の操作ボタンが6個、画面下に横一列に並んでいるので、シンプルで誰でも使いやすい設計になっています。さらに、日点オリジナル加工として触ってボタンの位置がわかるよう両端から2番目のボタンにそれぞれ凸点シールを貼っています。

スキャンボタンを長押しするとスキャンが始まり、その場で受信できるラジオ局がセットされ、上下ボタンで簡単に選局ができます。

ワイドFMに対応していますので、災害時でも影響を受けにくく良い音質で聞くことができます。

にってんフォーラム〈第129号〉 2023 秋

発行 2023年10月25日〈年4回発行〉

発行人 長岡英司

編集人 立花明彦

発行所 社会福祉法人日本点字図書館

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4

電話03-3209-0241（代） FAX03-3204-5641

URL <https://www.nittento.or.jp/>

*本誌の記事を撮影したり光学的に読み取ったりして、SNS等で発信したりウェブサイトへ転載することを固くお断りします。

ワクワク! / ドキドキ!



あなたと映画を観たい。

映画みていて!

「スマホで聞く音声ガイド」



NPO メディア・アクセス・サポートセンター

〒151-0061 東京都渋谷区初台 1-51-1

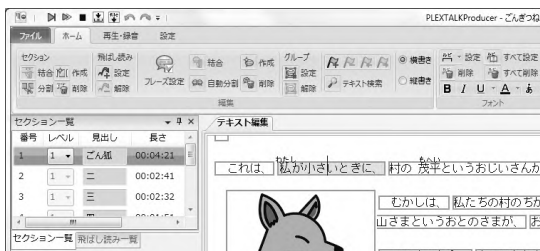
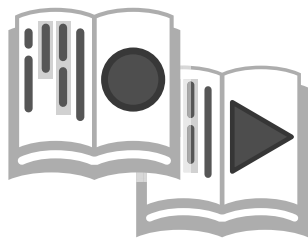
初台センタービル 709号室

MASC

検索



音声 / テキスト / マルチメディア DAISY 製作ツール



PLEXTALK Producer

で作れる 新しい DAISY のカタチ

音声DAISY … 録音図書の標準方式

- ⊗ テキスト文書から音声合成で図書が作れます
- ⊗ CD 書き込み機能で、直ぐに貸し出しできます

テキストDAISY … 音声のない DAISY

- ⊗ データ容量が小さく、受け渡し時間が短縮できます
- ⊗ ルビ振りにも対応し、正しい読みも担保できます

マルチメディアDAISY … 音声とテキストのマルチメディア

- ⊗ ディスレクシアなど合理的配慮の利用対象者が広がります
- ⊗ 既存の音声を使ってマルチメディア化もできます

90日間無料操作体験版は www.plextalk.com からダウンロードできます

サポート OS	Windows 11、Windows 10、Windows 8.1 以降 ※ 各 OS は日本語のみサポート
プロセッサ	Intel Core i3 以上推奨
メモリ	4GB 以上推奨

レイアウトツール 文字化ツール (OCR) でデータ取り込みが楽々 !

PLEXTALK Producer 簡単取り込みセット ¥88,000 (税込)

PLEXTALK Producer 単体 ¥49,500 (税込) 簡単取り込みオプション ¥38,500 (税込)

販売元 :

シナノケンシ株式会社

〒386-0498
長野県上田市上丸子 1078

製品情報、ご注文はホームページ:

www.plextalk.com

※ Windowsは米国Microsoft Corporationの登録商標です。Intel Coreは米国および/またはその他の国におけるIntel Corporationの商標です。

※ 記載の情報は2022年6月のものです。機能および外観デザインなどは、性能向上その他の理由で、予告なく変更することがあります。PLEXTALK、PLEXTALKロゴはシナノケンシ株式会社の商標です。